

# 短歌という宝石

歌人 栗木 京子

短歌はまことに不思議な表現形式である。万葉集の成立は八世紀半ばとされているが、日本最古のこの歌集にすでに短歌は登場する。もつとも、この時代は長歌（「五音と七音」の

組み合わせを二回以上繰り返し、最後に五七七で結ぶ形）が主流で、短歌（五七七七七）は長歌の後ろに添え物として置かれるだけであつた。短歌が表舞台に躍り出るのは平安時代になつてから。古今和歌集をはじめとするさまざまな勅撰和歌集が編まれ、そこに収められた歌の数々はやがて日本人の美意識の基盤となつていった。

明治時代や敗戦直後の昭和二十年代など、時代の変わりめに「短歌は古臭い」「短歌は片言にしかすぎない」といった滅亡論が湧き上がるのだが、それでもなぜか押しつぶされてしまうことなく、現在まで生き残っている。

ところで、自歌自讃のようで恐縮だが観覧車の歌について少しだけ解説を付けさせてもらいたい。それは「君には一日我には一生」のところ、「一日」「ひとひ」「一生」「ひとよ」とルビを振つたことである。「いちにち」「いっしょう」と読んでも意味の上では問題ないのだが、作者としてはここは何としても「ひとひ」「ひとよ」のなめらかな語感を大切にされた。「ひとひ」と「ひとよ」。たった一音の差が一日と一生という大きな隔たりを生む。そのダイナミズムは、三十一音の小さな空間だからいっそう際立ってくる。

私の大好きな短歌に、  
あぢさるの藍のつゆけき花ありぬ  
ぬばたまの夜あかねさす昼 佐藤佐太郎  
がある。みずみずしい藍色のあじさいが咲いている、夜も昼も。それだけを表している歌だが、シンプルな中に豊かな味わいを持っている。声に出して読み上げるとなおさらアの音を母音に持つ語が多く用いられていることに拠るのだろう。さらに、「ぬばたまの」「あかねさす」という表現に注目したい。いずれも枕詞である。枕詞は万葉集以来の伝統を持つ修辭法で、決められた言葉に付いて独特のニュアンスをもたらす。引用歌の場合は

万葉集の昔から数えて千数百年。三十一音のちっぽけな形式のどこにそんなしぶとさがあるのだろう。考えるほどに不可解な気持ちになつてくる。

ただ、不可解ながらも私なりに生き残りの理由を考えてみると、まず思い当たるのが短歌のリズムのことである。

短歌は五音と七音の繰り返しで成り立っているのだが、五音と七音のリズムは日本語ととても相性がよい。現在でも、標語やキャッチフレーズなど語感がのびやかでつい口ずさんでしまう表現は五音と七音の組み合わせであることが多い。

飛び出す車は急にとまれない  
お出掛けはひと声かけて鍵かけて  
注意一秒けが一生  
たとえばこれらの標語は五音と七音で出来

「ぬばたまの」が「夜」に掛かる枕詞で、「あかねさす」は「昼」に掛かる枕詞。たとえば枕詞「あかねさす」は昼のほかにも「日」や「むらさき」にも掛かる。それゆえ、「あかねさす」と聞いただけで、

あかねさす紫野行き標野行き  
野守は見ずや君が袖振る 額田王

万葉の時代の女性歌人の恋歌をふつと思いつき出させるところがある。すると、目の前のあじさいの花が何やら万葉人の化身のように感じられて、かぐわしい気持ちになる。

もちろん、古典の知識がなくても短歌の解釈に差し支えないのだが、歴史を知れば知るほどより深い鑑賞ができる。それが長い伝統を有する短歌ならではの醍醐味と言えよう。

明治の末から昭和にかけて歌人、詩人として活躍した北原白秋は歌集『桐の花』に収めた散文の中で、「短歌は一個の小さい緑の古宝玉である」と記している。エメラルド色の小さな古い宝石。それが短歌なのだという。じつに美しい定義付けである。歳月の波に磨かれて輝きを増す宝石。これからもこの不思議な古宝玉を大切にしてゆきたいと思う。

ている。三つめにあげた標語を聞くと、じつは私は次の自作を思い浮かべるのである。

観覧車回れよ回れ想ひ出は  
君には一日我には一生

有難いことに教科書にもたびたび採り上げてもらっている歌である。「注意一秒」の標語と「観覧車」の短歌の下旬を比べてみよう。

注意一秒／けが一生  
君には一日／我には一生

どちらもなかなかきれいな対称形を成している。すべての標語や短歌が対称性を持つてよいというわけではないが、五音と七音の織り成すしらはとてもリズムミカルなので、繰り返しや対句と自然に融合する特徴がある。やや大げさに言えば、日本人のDNAは呼吸したり歩行したりするように、短歌のリズムと親和性を持つのである。



栗木 京子（くりき きょうこ）  
1954年愛知県生まれ。京都大学卒業。高安国世に師事。2002年短歌研究賞。歌集『夏のうしろ』により、2003年若山牧水賞。2004年読売文学賞。歌集『けむり水晶』により、2007年遼空賞、芸術選奨文部科学大臣賞。歌誌『塔』選者。ほかに歌集『水惑星』、『中庭』、『万葉の月』などがある。